

# 小 論 文

## 注 意

1. 問題は全部で6ページである。
2. 解答用紙に氏名・受験番号を忘れずに記入すること。(ただし、マーク・シートにはあらかじめ受験番号がプリントされている。)
3. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
4. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけない。
5. 解答用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

### マーク・シート記入上の注意

1. 解答用紙(その1)はマーク・シートになっている。HBの黒鉛筆またはシャープペンシルを用いて記入すること。
2. 解答用紙にあらかじめプリントされた受験番号を確認すること。
3. 解答する番号の○を塗りつぶしなさい。○で囲んだり×をつけたりしてはいけない。

解答記入例(解答が1のとき)

1	●	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

4. 一度記入したマークを消す場合は、消しゴムでよく消すこと。×をつけても消したことになる。
5. 解答用紙をよごしたり、折り曲げたりしないこと。

以下の文章を読み、設問に答えなさい。なお、問1・問2・問3の解答は解答用紙(その2)に、また問4の解答は解答用紙(その1)に記入すること。

造物主は人間を心身のさまざまな能力において平等につくった。したがって、他と比べて明らかに身体が頑健で、頭がよいという者がしばしば見受けられるにしても、すべての能力を総合するなら、個人差というものはたいして大きくならない。したがって、ある人物がある利益を要求できるのに、余人には同様の要求が許されないなどということはない。たとえば、肉体的な強さについて言えば、最もひよわな者であっても、密かに陰謀を企てるか、あるいは自分と同様の危険にさらされている者を語らうかすれば、最強の者を討つことは可能である。

また、知力に関して言うと人々は、肉体的な強さを基準とする場合以上に平等である。ただし、言葉にもとづく技術、特に学問という名の立論の技術は別である。それを支えているのは普遍的で無謬の規則である。こうした技術は、ごく少数の者がごくわずかな事からについて身につけているにすぎない。なぜならそれは、生まれつきの能力ではないし、また世知と異なり、何か他のものを追求しているうちに自然に身につくものでもないからだ。世知が自然に身につくのは、それが経験に過ぎず、等しい時間をかけて何らかの事から等しく没頭するなら、だれにでも等しく与えられるからである。

人によってはもしかすると、このような平等性を信じないかもしれない。それは、自分には才知があるという自惚れが働くからである。大半の人間は、一般大衆よりもはるかに才知があると自己評価している。有象無象として扱われずに済むのは、評価する当の本人を別とすればごくわずかな人々だけである。それは、名声の持ち主であるとか、あるいは意見が一致しているとかいった理由で一目置かれる人々である。大半の人々がこのように自分に甘い自己評価に傾斜するのはなぜか。「機知・雄弁・学識において自分に優る者は数多い」ということを頭では認めながらも、自分と同じほど才知のある人間が大勢いるということが信じられないのが人間の性だからである。これは無理からぬことである。というのも、自分自身の才知は眼前に見えているのに対し、他人の才知は距離を置いて見る外はないからである。

しかし、このような優越感が生じるということはむしろ、人間がその能力において不平等というよりも平等であるということを証明しているのである。それは確かである。なにしろ、各人がそれぞれの分け前に満足しているということ以上に、配分が平等であることを示す証拠は通常、存在しないのだから。

このように能力が等しいと、目的達成の希望も等しくなる。したがってふたりの者が同一のものを欲しながら、それを共有できない場合、両者は互いに敵となる。そして、主として自己保存（場合によってはもっぱら快樂）を目的とし、そうした目的を達成する過程で相手を撲滅または征圧しようと努める。このことから次のような事態が生じる。自前の力のほかには侵略者を追い払うための手段が何もない場所で、種を播き苗を植え、便利な家屋敷をつくり所有するとしよう。やがて余所の連中が、統合した武力をもって戦闘準備を整え、襲いかかってくるであろう。恐らく、農園主は労働の成果のみならず生命または自由まで奪われるだろう。しかし、侵略者もまた、いずれ他の侵略者によって同様の危険にさらされることになる。

こうした相互の猜疑心から身を守るためには、先手を打つことほど理にかなった方法はない。それはすなわち、力や策略を用いてできる限り全員の身体を長期にわたって支配し、最終的には、こちらに危害を及ぼすような大きな力を無害化することにはかならない。それは、自己保存にとって必要な、一般的に許される範囲にとどまることもある。だが、自己の安全を図るのに必要な程度を越えて、征服行為という形で自己の力を試して悦に入る者もある。平素控えめに身の程を弁え、進んでおとなしくしているような人々は、どうなるのか。もし侵略によって自己の力の増進を図らないとすれば、守勢に立たされたまま長い間持ちこたえることはできない。してみれば、他に対する支配の増大は自己保存にとって必要であり、許されるのが当然ということになる。

さらにまた、私たち人間は、私たち全員を畏怖させるような権力が存在しない限り、仲間とのまじわりに喜びを感じない（それどころか、はなはだしい悲哀を感じる）。それはこういうことである。人間はだれしも、自己評価に匹敵するような高い評価を仲間から得たいと願う。そして、少しでも軽蔑や過小評価の気配を感じると、自分を侮った人物に打撃を与えることによって、また、他の者に対してはそれを見せしめにするることによって、もっと高い評価を引き出そうと知らず知らず力を尽くす。

それは、双方をなだめる共通の権力が存在しない場合、互いに相手を滅ぼすのに十分であるほど激しいものとなる。

以上のことから、人間の本性には紛争の原因となるものが主として三つあることが分かる。第一に、<sup>てきがい</sup>敵愾心。第二に、猜疑心。第三に、自負心。

これらのものに突き動かされると人は侵略に走る。第一の、敵愾心にもとづく侵略は、利益の獲得を目的とする。第二の、猜疑心にもとづく侵略は、安全を確保するためである。第三の、自負心にもとづく侵略は、名声を得るためである。いずれの場合も暴力が発動される。第一の場合は、他の人々をその妻子や家畜ともども支配し働かせるためである。第二の場合は、自己防衛のためである。第三の場合は、ちょっとした発言、ちょっとした笑い、ちょっとした異論など、些細な過小評価のしるしを抑圧するためである。その際、そうした過小評価が直接本人自身に向けられているか、それとも間接的に親族、友人、民族、同業者仲間、家門に向けられているかは問われない。

以上のことから明らかであるが、だれをも畏怖させるような共通の権力を欠いたまま生活している限り、人間は、戦争と呼ばれる状態、すなわち万人が万人を敵とする闘争状態から抜け出せない。このような言い方は誇大ではない。なぜなら、戦闘ないし戦闘行動に携わっているときだけが戦争だというわけではないからだ。戦闘によって争う意志を十分に示しているなら、戦闘と戦闘の間も戦争なのである。したがって戦争の本質を考察する際は、天候の場合と同じように、時間という概念を考慮に入れる必要がある。一度や二度にわか雨が降ったからといって、それは悪天候とは言わない。悪天候の本質は、にわか雨が降るような天気が何日間も続くということにある。それと同じように戦争の本質は、実際の戦闘行動にあるのではない。平和に向かう保証のないまま長期間にわたって戦闘が繰り返し起こる傾向が知られているならば、そこに戦争の本質があるのだ。それ以外のすべての時期を平和という。

こうした万人の万人に対する戦争から当然の帰結として導かれるのは、不正なものは何もないという結論である。ここには、正否とか正邪とかいった概念が存在する余地はない。共通の権力が存在しないところには、法も存在しない。法の無いところには不正もない。武力と欺瞞は戦争における二大徳目である。正義と不正は肉体の機能でもないし、頭脳の機能でもない。仮に正邪がその種の機能であるとするならば、天

涯孤独な者でもそれを、感覚や情念と同じように備えているということになろう。ところがそれは、孤独な人間ではなくて、社会生活を営んでいる人間に関する性質なのである。

万人の万人に対する戦争状態の帰結として導かれるものは他にもある。所有も支配も存在しない状態、有り体に言えば「私の物」と「あなたの物」との区別が不明確な状態がそれである。そこでは、自力で獲得できるものだけがわが物になるのであり、しかもそれは、自力で維持できる間に限られる。

出典：ホップズ，2014年，『リヴァイアサン1』角田安正訳，光文社（一部省略，原著は1651年）

#### 問 1

本文の主張を200字以内の日本語で要約しなさい。

#### 問 2

問 1 で要約した主張に対する論理的な反論を200字以内の日本語で述べなさい。

#### 問 3

問 1 と問 2 を踏まえた上で、あなたはどちらの立場に立つか表明し、それを現代の具体的な事例をあげながら300字以内の日本語で展開しなさい。

問 4

上記の文章で言及されている「権力」は「国家」に相当するが、当時は近代国家形成の黎明期であり、ホッブズが想定していた「国家」は、現在のそれとは必ずしも同じではない。

これに関連して、現在の「国家」について述べた次の文章の空欄   ～   にあてはまる最も適切な語を、下の語群の中からそれぞれ選び、その番号をマークしなさい。ただし、

1. 同じ番号の空欄には同じ選択肢が入る。
2. 語群には正解と無関係な選択肢も含まれている。
3. 一桁の番号の選択肢を選ぶ場合は、十の位に「0」をマークすること。

凡例 空欄   の解答として選択肢 4 を選ぶ場合→04 とする。

21	<input type="radio"/> ① <input type="radio"/> ② <input type="radio"/> ③ <input type="radio"/> ④ <input type="radio"/> ⑤ <input type="radio"/> ⑥ <input type="radio"/> ⑦ <input type="radio"/> ⑧ <input checked="" type="radio"/> ⑨
22	<input type="radio"/> ① <input type="radio"/> ② <input type="radio"/> ③ <input checked="" type="radio"/> ④ <input type="radio"/> ⑤ <input type="radio"/> ⑥ <input type="radio"/> ⑦ <input type="radio"/> ⑧ <input type="radio"/> ⑨

現在の世界には、  か国近くの独立国家がある。国家は、国民、領域、  の3つの要素によって成り立っている。国家の   は、他国による   の原則と、たがいに対等であるという   平等の原則に基づいている。国家の   がおよぶ範囲を領域といい、領土、領海、領空から成る。領海の外には、  と   があり、水産資源や   などを開発し保全する権利は沿岸国に認められている。  の外側の水域は   と呼ばれ、どの国の船も漁船も自由に航行や操業ができる。なお、  や宇宙空間については、どの国も領域として支配することができない。

領土や資源をめぐる国家間で対立や争いが起こっているところもある。こうした問題を解決するために、国際連合には   が置かれており、その本部は   にある。ただし、  で解決を図るためには、当事国双方の同意が不可欠とされている。

語群

- |                  |                 |                  |
|------------------|-----------------|------------------|
| 1. 100           | 2. 200          | 3. 300           |
| 4. 安全保障理事会       | 5. 外海           | 6. 海底            |
| 7. 管轄権           | 8. グリーンランド      | 9. 権利            |
| 10. 公海           | 11. 鉱産資源        | 12. 国際司法裁判所      |
| 13. 国際水域         | 14. 主権          | 15. ジュネーブ(スイス)   |
| 16. 水力資源         | 17. 世界貿易機関(WTO) | 18. 接続水域         |
| 19. 大陸棚          | 20. 統治          | 21. 内海           |
| 22. 内政不干渉        | 23. 南極大陸        | 24. ニューヨーク(アメリカ) |
| 25. 排他的経済水域(EEZ) | 26. ハーグ(オランダ)   | 27. プレート         |
| 28. 北極海          | 29. 民族自決        | 30. 領土不可侵        |

